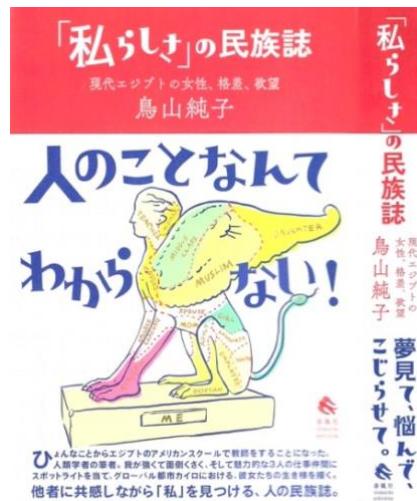


『私らしさの民族誌・・・現代エジプトの女性、格差、欲望』

鳥山純子著、春風社、2022年3月18日、3200円+税、

ISBN 978-4-86110-786-3



本書は書名に「民族誌」としているが、民族誌としても文化人類学研究としてもかなりユニークな著作である。しかも、僅か半年に過ぎない期間に得られた材料を丁寧に書き留めることで、2000年代のエジプトの高学歴の女性たちの生々しい姿をとらえている稀有な書籍である。

調査期間が限られているということは、印象的な側面が正面から把握されるという、研究上のプラスの面もあるが、調査対象についての経年変化がとらえにくくなるというマイナス面もある。ただし、本書は、これらの欠点を気にしないで読み進めることができる。それには著者なりの深い理由がある。

著者は偶然の出会いからエジプトの有名な私立校、アメリカンスクールで、半年間の教師の役割を引き受けることになり、この機会を利用して3人の同僚女性の生き方を調べ尽くすという挙に打って出た。この調査が効果的に実施されたのは、著者が1998年にエジプト人男性と結婚をしてエジプトで暮らすことになって以降、様々な方法でエジプトのムスリマ達の生き方について調査を繰り返してきたからであった。

つまり、著者自身が実生活の中から経験し発見してきた「私らしさ」の真相を検討することが、エジプトで生きる女性たちの実像を明らかにすることになったのであろう。そこにはいわゆるイスラム的な女性像でもなく、家父長的な社会で優等生としてふるまう姿でもなく、強烈な自己主張を持ちつつ、自分自身を生きる女性像があった。表現の方法が違っているが、「私らしさ」を、日本人女性よりもはるかに強く打ち出す姿が見られるのである。

本書はやがて結論的にジェンダー論に行きつくが、その途中には、現代のエジプト社会や家庭の在り方、基礎教育の問題などにも触れていて、その点でも宝箱のように多くの情報が得られる。

今年の世界経済フォーラムによると、日本の男女平等ランキングは世界で116位であった。何とも耳の痛い話であるが、本来、女性を尊重したとされる預言者ムハンマドの教えに従えば、イスラームの女性はもっと「私らしさ」を表現しても良いと思う。さらに言えば、日本の女性もイスラーム世界の女性たちの意気込みを学び、自己主張をするべきである。

私がイスラーム世界のフェミニズムを学んだのは、ナワール・エル・サーダーウィの著書によってであり、これによって、外部からは見えにくいが、ムスリマ達がイスラーム法のもとで、身体的にも精神的にも生命にかかわるほどの虐待を受けているという事実を知ったのである。しかも、その虐待のいくつかは国際的な批判を受けながらも今日まで継続して実施されている。

しかし、私がこのような事実について、イスラーム・ジェンダー論の中で、クルアーンで教えられている神学思想とは異なるとして、批判的に取り上げると、そのような批判は「ジェンダー・オリエンタリズム」の典型であるとして、最近では逆に批判されるようになつた。

本書には名誉殺人もFGM(女子割礼)も、取り上げられていない。少なくともエジプトの都市部には、これらの習慣が消えてしまつてゐるかのようである。それが事実であれば、私は今後、これらの出

来事はすでに消えてしまった悪しき旧弊であるとして記載しなければならないであろう。

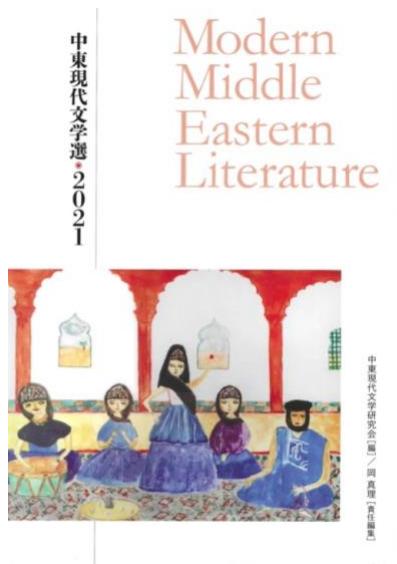
本書の表紙に「人のことなんてわからない！」というイラストがあるが、地域の旧弊をクルアーンの教えとして強制されてきた女性たちが、もはや苦しむことがないのであれば、それはそれでよい兆候であるのかもしれない。女性たちが、他人のことなどに関心を持つこともなく、目の前の自分のことだけに注意をしていれば、それで安心して暮らしていくのであれば、それは平和なことかもしれない。読者はここにきて、ようやく安堵するであろう。

本書は丁寧に著述された研究書であるが、読み物としても実に面白い。これはコロナ禍で閉じ籠っている男性にも女性にも、まずは読んでほしいノンフィクションでもある。

## 『中東現代文学選・2021』

中東現代文学研究会 [編] / 岡 真理 [責任編集]、

2022年3月21日、出版：プロジェクト・ワタン事務局



本書は中東地域の現代文学を読み取り理解することを通じて、現代社会に生きる人間が「ワタン」（祖国/故郷）をどのようなものと

して生きているかを研究するプロジェクト「京都大学人間・環境学研究科岡真理研究室科研プロジェクト」、通称「プロジェクト・ワタン」より出版された昨年度の研究成果『中東現代文学選 2021』である。

中東地域とは、3大陸にまたがる広大な地域を指すが、その広大な地域から人々が世界各地に移住する現代では、文学に用いられる言語も、アラビア語、トルコ語、ペルシア語だけでなく、人々の移住先の多岐にわたる言語が用いられる。

本書に収録されている34点の作品、詩・エッセイ・小説の言語は朝鮮語、イタリア語、英語、ドイツ語、インドネシア語、アゼルバイジャン語、ペルシア語、トルコ語、アラビア語、ヘブライ語、フランス語と多岐にわたる。この中では、中東を代表するアラビア語の作品は7点しかない。これらは27人の新進気鋭の研究者によって日本語に翻訳されている。

各作品の最後には、翻訳者による著者と作品についての解説が入っているのは有難いことである。読者は最初に解説を読んで、作品が書かれた背景を理解し、著者に対する親近感を抱いてから、作品へと進んでもかまわない。読み方は自由である。

作家たちが中東を出自として持つ者とそうでない者との区別なく、それぞれに異なった言語で、異なった背景を持つ物語を創作することで、中東地域と「ワタン」との関係性を読み取ることができる。一見、異なる世界があるかのような作品のなかに、現代の中東との繋がりとイスラーム社会という共通性が読み取れる。その広がりによって、21世紀の地上で生きる人々の「祖国」とは何か、その姿が明らかになるであろう。「祖国」という言葉には、様々な感情が、怒り、悲しみ、希望、愛情、祈りなどが潜んでいるからである。

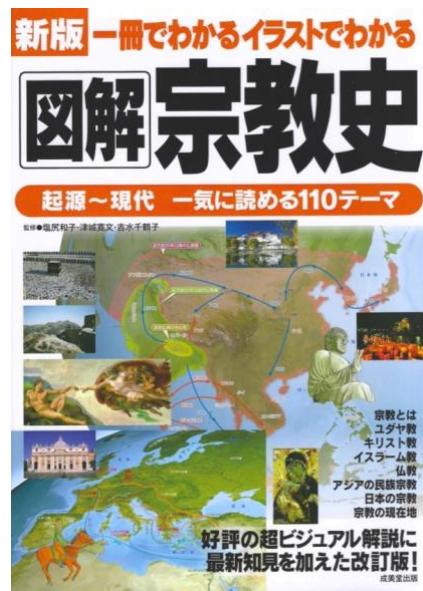
『新版』一冊でわかるイラストでわかる「図解」宗教史』

監修：塩尻和子・津城寛文・吉水千鶴子

編集：小学館クリエイティブ、

出版：成美堂出版 2022年8月10日、1500円+税、

ISBN978-4-415-33165-2



本書は 2008 年に出版された初版を大幅に改訂して出版したもので、初版では不足していた解説を大幅に追加して、さらに現代世界で必要とされる様々な政治的問題に付随する宗教的問題にも丁寧に解説を付けた。

私（塩尻）は「宗教とは」から始め、「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム」まで旧版を訂正し、不足する情報を追加して、「監修」というより「著者」に近いほど記載した。さらに、宗教と食習慣、特にイスラームの「ハラール」やユダヤ教の「コーシェル」の解説を施した（148-149頁）。宗教とジェンダーの問題も取り上げ（150-151頁）、編集中にロシアのウクライナ侵攻が開始され、急遽「東方正教会」の解説も追加した（152-3頁）。

新版では、宗教発展の歴史的経過を重要視し、旧版でユダヤ教がキリスト教の後に配置されていたことを修正した。また写真を増やして、歴史的状況を理解しやすいように工夫した。

訂正・追加箇所が多くなり、解説文が増えたため、文字が小さくなり、煩雑に見えるところも増えたが、より詳細に解説することができたと思われる。

初版から 14 年も経過したために、監修者全員が筑波大学の教員であった時代は過ぎ、塩尻も、「日本の宗教」を担当した津城寛文先生も退職して筑波大学名誉教授となり、「仏教」を担当した吉水千鶴子先生だけが教授として活躍している。

大判で持ち運びには不便だが、イラストと写真を楽しみ、解説を味わって読んで物知りになってください。これから高校・大学受験の勉強にも役立ちますので、お子様やお孫様にもお勧めです。

「文責：塩尻和子」